

ナタンの預言①

(サムエル7:1~17)

一、人のビジョンと神の導き

ダビデ王は、主の宮を建てたいと願いました。すなわち、神殿建設のビジョンを思い描きました。そこで王は、預言者ナタンに自らの思いを語りました。3節です。〈すると、ナタンは王に言った。『さあ、あなたの心にあることをみな行いなさい。主があなたとともにおられるのですから。』と。ナタンはダビデ王の発案でありビジョンをよしとしたことが分かります。ところが、主はその晩、預言者ナタンに語られました。4節です。〈その夜のことである。次のような主のことがナタンにあった。〉と。主は何を語られたのでしょうか。5節より7節を見てまいります。〈行って、わたしのしもべダビデに言え。主はこう仰せられる。あなたはわたしのために、わたしの住む家を建てようとしているのか。〉(略) わたしがイスラエル人すべてと歩んできたどんな所ででも、わたしが、民イスラエルを牧せよと命じたイスラエル部族の一つにでも、『なぜ、あなたがたはわたしのために杉材の家を建てなかつたのか』と、一度でも、言ったことがあるのか。』と。一見して、ダビデの発案を退けているようにも見えますが、8節以降を見ると、そうで

はないことが分かります。すなわち、ダビデにあらわされた祝福が語られています。さらに、11節を見ますときに、主ご自身が神殿を造るとおっしゃっています。11節3文目です。〈さらに主はあなたに告げる。『主はあなたのために一つの家を造る。』〉と。主は、ダビデがビジョンを思い描き、それがそのまま実現することをよしとされませんでした。一旦それを否定し、神御自身がことを行うと語られました。

二、神の御計画の不思議

主は、ダビデが思い描いた以上の祝福を賜りました。12節、13節です。〈あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのもとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をどこしえまでも堅く立てる。〉ダビデの身から出る世継ぎの子とはソロモンです。その者が「わたしの名のために一つの家(神殿)を建て(る)」と語られています。しかも、神殿建設の約束だけでなく、「わたしはその王国の王座をどこしえまでも堅く立てる」と、ダビデ王朝が末永く続くという約束をなさいました。さらに、15節をご覧ください。〈しかし、わたしは、あなたの前からサウルを取り除いて、わたしの恵みをサウルから取り

去ったが、わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。〉と語られています。そうしますと、サウルに対する約束とまったく異なります。私たちが見ますと「不公平」に映りますが、それは、主のなさることであって、私共には分からない領域です。

三、主がとどめられた理由

最後に、主がダビデの思い描いたビジョンである神殿建設をよしとされなかつた理由について、ご一緒に考えてみたいと思います。なぜ、主はそんなりとダビデの願いを聞き入れられなかつたのでありましょうか。実は、そこには主への信仰が偶像礼拝に堕ちてしまう危険性があつたからです。主の宮を造るとは、主のためにrippana建物を造ることを意味します。ダビデが主の宮を造りたいと思いついたとき、主なる神が宿っていると人々が信じていた主の箱(契約の箱)は、幕屋に安置されていました。幕屋とは、最下層の遊牧民が住居として用いていたテントと同じでした。一方、ダビデは杉材という高級な建築材でできた王宮に住んでいました。主の宮を、rippana杉材で造りたいと考えるのは当然のことです。ですが、そこには落とし穴があります。それは、主のためにrippana建物を建てることによつて、主なる神を自分のところに置くことができるという誘惑です。そこ

で主は、「主なる神は人間が造つた器の中に収まるものではない」と言わんとされたと思われまふ。

これを、今日に当てはめるなら、主のためにrippana会堂を建てようとする際に、あまりに会堂に凝つてしまうと、同じような誘惑が来ます。あるいは、「イスラエルの神は賛美を住まいとされる」という思いから、礼拝において賛美とワーシップソングを多く取り入れたとします。それによつて、礼拝において主の臨在を「感じた」とします。そうしますと、気をつけませんと、礼拝において美しい賛美をささげたから主が臨在される、主の臨在を求めめるためには賛美礼拝の形が必要であると考えるようになります。ですが、主なる神は礼拝スタイルに縛られるお方ではないことをお示しになられます。

では、神はどのように私共に近づかれるのでしょうか。それは、イエス・キリストが成し遂げられた救いの業を思い、主をあがめ、主に従うところにあると言えます。

信仰の世界は、私たちがこれこれをしたから神がそうなされた、とは言えないものです。ならば、私たちができることは何なのでしょう。それは、今の自分があるのは主の恵みによると知つて、恵みに生かされることです。言い換えるなら、御霊によつて歩むことです。